

|             |                                                           |
|-------------|-----------------------------------------------------------|
| 氏 名         | はつ どり し ほ<br>服 部 志 帆                                      |
| 学位(専攻分野)    | 博 士 (地域研究)                                                |
| 学 位 記 番 号   | 地 博 第 62 号                                                |
| 学位授与の日付     | 平 成 20 年 3 月 24 日                                         |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当                                   |
| 研究科・専攻      | ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻         |
| 学 位 論 文 題 目 | 熱帯雨林保護と地域住民の生活・文化の両立に関する研究<br>—— カメルーン東南部の狩猟採集民バカの事例から —— |

論文調査委員 (主 査) 教 授 市 川 光 雄 准教授 木 村 大 治 准教授 山 越 言

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、中央アフリカの狩猟採集民バカと熱帯雨林環境との関係を生態人類学的手法を用いて明らかにし、その成果をもとに、この地域において進められている森林保護計画の問題点の指摘することによって、望ましい森林保護のあり方についての検討をおこなったものである。

序論では、アフリカにおける自然保護と住民に関するこれまでの研究が紹介され、本研究の目的と位置づけが述べられている。従来の研究では、住民の生活・文化と自然環境の関係についての十分な理解がないまま、資源の持続性や自然保護をめぐる利害関係が議論されるなど、森林保護という多面的で複雑な問題を単純化して論じる傾向がみられた。また保護計画の実施に際しても、地域固有の歴史や文化に配慮する必要性が指摘されてはいるものの、実際にそれを主題にした研究は少なく、とくに住民の生活・文化に関する十分な定量的、定性的なデータにもとづいて保護計画のあり方を検討した研究はほとんどみられない。申請者の研究は、このような点に着目して実施されたものである。

第一章では、バカの居住形態や生業活動、食生活、物質文化、家計等に関して、長期調査から収集した定量的かつ詳細なデータをもとに、彼らの生活変容と森林資源への依存について検討している。その結果、1950年代から進められた定住化政策の浸透によって、農耕化や狩猟形態の変化が進み、近隣農耕民への労働力提供の機会や、食生活や物質文化における農作物や工業製品、現金への依存が増したが、それにもかかわらず、食生活、物質文化、現金収入のいずれにおいても森林産物がひきつづき重要な位置を占めていることが明らかになった。

第二章では、バカの動植物の分類や利用法に関する知識、信念、民話についての詳細な記載を行ない、これらが森に生きてきたバカの生活や文化において有する意味と、近年の生活変容がこれらの知識に与える影響について検討している。バカは、動植物に関する具体的な知識を豊富に持っており、これらがバカの森における活動を支えているのであるが、こうした知識が単に物質的な有用性にとどまらない多様な文化的意味を内包していることを示すとともに、近年の生活様式の変化や学校教育によって、こうした知識に変化がみられることを指摘している。

第三章では、植物に関する知識にみられる特徴を分析した。植物名や各種の利用法にみられる知識の個人差を比較検討したのち、とくに個人差が大きい薬用植物の知識について、個人差が生まれる要因を知識の習得の経緯から分析している。その結果、成人のバカの間では、植物名や食用や物質文化に関する知識がかなりの程度共有されていたのに対し、薬に関する知識はあまり共有されていないことが明らかになった。バカは薬の知識を主に近親者から習得しており、薬に関する知識には本人や近親者の病歴や試行錯誤の歴史が反映されていること、そしてこのことが個人ごとに異なる知識を生み出す一因になっていることを示唆した。また、植物名は全般に共有される度合いが高かったが、それはバカの生活・文化における植物の重要性和、相互のコミュニケーションにおける共通の命名の必要性にもとづくものであるとしている。さらに、食用植物や物質文化に関する知識が共有される程度は、素材が有する属性についての共通した評価と、社会生活において知識を共有する機会の多寡に依存すると論じている。

第四章では、1990年代後半に開始された森林保護プロジェクトの概要とプロジェクトに対するバカの反応を記述し、それから現行のプロジェクトが抱える問題点を明らかにするとともに、この地域で求められる森林保護のあり方について考察している。保護プロジェクトに対してバカはきわめて消極的な反応しかみせないが、そのような反応は現行の計画においてはバカによる森林利用がほとんど考慮されていないことに由来することを示唆している。また、こういったバカの反応を保護計画に対する農耕民の積極的な対応と比較し、保護計画等から生じる利益が農耕民に独占される傾向を指摘している。さらに保護計画と一体的に進められた新しい森林・土地区分や伐採事業からの利益還元の仕組みが地域社会のなかで新たな摩擦を生み出していることを述べている。これらの結果、近年この地域では土地や資源をめぐる対立や民族間関係の悪化、バカのマイノリティ化の促進といった問題が引き起こされており、このような問題を解決するために、保護プロジェクトの推進者は、地域における住民の生活と文化、民族間関係などを考慮し、住民による森林利用を組み込んだ森林保護を考案する必要があると論じている。

## 論文審査の結果の要旨

中央アフリカにおける熱帯雨林の保護活動は、1980年代末から活発化した伐採事業に対抗する形で盛んになったが、保護計画の進行とともにさまざまな問題が露呈している。とりわけ問題になっているのは、保護計画が森林で生活してきた住民の生活と文化を脅かしていることである。そこでは、人間と森林との間の多面的で複雑な関係についての十分な理解がないままに、森林資源の持続性や保護計画をめぐる利害関係が議論されるなど、保護をめぐる社会的、文化的な問題が軽視もしくは単純化されて論じられる傾向がみられた。また実際の自然保護計画に関しても、地域住民に配慮する必要性が言及されてはいるものの、それを主題にした研究はきわめて少なく、とくに住民の生活・文化に関する十分な定量的、定性的なデータにもとづいて保護計画のあり方を検討した研究はほとんどみられない。地域における具体的な事例にもとづいて実施された本研究は、このような研究の欠落を埋める試みとして高く評価できる。

本研究ではまず、中央アフリカのカメルーンに設けられた自然保護区周辺において、森の民として知られる狩猟採集民（バカ・ピグミー）のもとで長期間に及ぶ参与観察をおこない、そこから得られた定量的かつ詳細なデータをもとに、バカの森林資源への依存の実態が明らかにされている。森の住民が多種多様な形で動植物等の非木材資源を利用していることが丁寧に記載されるとともに、そうした事実から、現行の伐採事業や森林保護計画がいかに彼らの生活と文化の維持にとって障害となるかが、きわめて具体的な形で示されている。

近年、熱帯雨林の商業的伐採による炭素確保および地域開発の手法が疑問視されている。それにかわって、森林のもつ環境サービス面での貢献、とくにその炭素隔離機能が注目を浴び、森林を保護することが経済的価値を生み出すような仕組みが用意されつつある。また、住民の居住と活動を排除した従来のような保護計画が問題視され、森林に対する住民の慣習的権利の尊重が謳われるようになっていく。こうした状況のなかで、地域住民による非木材森林資源の利用は、森林がもつ地球環境維持機能と両立するうえ、住民の慣習的権利を保全し、貧困削減にも貢献するものとして期待されている。本研究は、このような熱帯雨林をめぐる新しい状況のなかで、地域における森林の保護とその利用の統合するための不可欠な基礎資料を提供するものである。

また本研究では、保護プロジェクトに対してバカの人びとがきわめて消極的な反応しかみせないことが示され、そのような反応が現行の計画において彼らの森林利用がほとんど考慮されていないことに由来することが示唆されるとともに、バカの反応を保護計画に対する農耕民の積極的な対応と比較して、保護計画への参加やそこから生じる利益が農耕民に独占される傾向があることが指摘されている。さらに、保護計画と一体的に進められた新しい森林・土地区分や伐採等の事業からの利益還元の仕組みが地域社会のなかで新たな摩擦を生み出していることも指摘されている。これらは、新しい機会の到来が住民に等しく利益をもたらすものではなく、地域社会における土地や資源をめぐる対立を激化させ、民族間関係の悪化や少数民族のさらなる周辺化といった事態を招く可能性があることを具体的に示した重要な指摘である。

本研究ではまた、森の民による多彩な森林利用を支えている在来の知識のあり方についても新しい知見が得られている。近年、自然保護計画においても在来の知識が果たす役割が注目されているが、そうした在来の知識にみられる特徴については必ずしも理解が進んでいるとはいえない。同一文化における知識の個人差の存在と、その生成の経緯について明らかにし

た本研究は、標準化した知識の獲得を目指した学校教育の外で、実践的に習得される知識にみられる重要な特色のひとつを示したものとして、またそのような知識を地域における自然保護や開発に活用する際に留意すべき点を示したものとして、高く評価される。

以上のように本論文は、良質なフィールドワークによって得られた豊富なデータをもとに、アフリカ熱帯雨林の保護と利用の統合という現代的課題に対して、非木材森林資源の利用とそれを支える在来知識の活用という側面からアプローチした研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。